續西遊記國字評

曾4
600
98

特
曽イ門 4
600
98

著作堂稿本

續西遊記國字評

癸巳仲夏漫録

著作堂圖書

續西遊記國字總評

是書清人の戲墨ふん全部一百回二十冊分ちて二帙を收めり一帙各十冊但し巻の一の標紙裏ふハ嘉慶十年新鐫眞復居士評點とあり又序の落款ふハ眞復居士とあり憶ふふ上の眞復ハ眞復の誤ちん いまゝ作者を詳ゝせされゝしたの眞復の作ることその序と毎回の批語 ゝて精せゝる者官ゝらふ用意せハ分明ちん第一

たの編の作者前記を孫悟空ホゝるを所機変多く且殺生のゝゝあると嫌 へりたゝゝて玄奘ホ師徒四人靈山佛所を到るゝ及て繹ゝる則悟空ゝ金箍 棒八戒ゝ九齒鈀沙悟淨ゝ宝杖を拿收めて易ふ禪杖とゝゝ殺生 のゝゝゝゝゝゝゝゝ且到彼僧灵虛子二人を命ゝて穴鍋を真經を護送せゝ ゝゝゝゝゝ於て孫猪沙の三徒弟遂ふ各用のゝとゝてその仕をゝ到彼灵

虚二人に在り批して云、機変殺伐ハ素より是佛の忌む所、本記に是ホの趣向
あるも実に佛意に称へり、さらハ伝し三蔵法師ハ孫猪沙三徒弟の幇
助により逆旅十四年〔続記にハ二十八年とハ蓋往返の歳月也〕の春秋を歴て十萬八千里の山河を踰越し九九
八十一難の魔障を脱離して竟に霊山雷音寺の佛所に到ることを
得たるハ是の功徳により清果を得て宜く成佛すべき者也けるを、三蔵
師徒四人ハかかる難行苦勤を経てやうやう霊山に到り如来に拝見してし、然
魔心いまだ方寸を去ざるに似て初のごとくならんにハ深信苦行甲斐なきに似たり、然
されバ三蔵師徒四人ながら魔を惹しの心あらハ釈尊決して真経を授けまじき
ことわりなれバこれらの趣向その理に称ひてかかる故に本記の文中に作者勤めて
さハ両舌を使ふことあり看官よく心をつけて見るべし 第二
霊虚子ハその初幻術を萬化因に学びしものなれバ吾友黙老翁の略評

中にいへるが如し、他いふべし孫悟空の神通不測の妙慧に及ぶべき。但し悟空ハ
機変を好むものなれバ魔を惹くことも多く霊虚子ハ機変を好まざるものなれバその
心術また礼やといひていふべし。されバ霊虚子も伏魔の段に機変を用る
ことなくあり、作者これらのいひわけとして機変も佛意によりて慈悲を旨と
されハなどか悟空并に諸魔の如きとて機変と同じからずといへり。是
則作者の両舌之諸魔の機変の事かかるハ論ずるまでも及ばず本記に至りて
悟空が行ふ機変ハ経擔護送の為且その師の魔難を救ふ為なれバ便
是霊虚子到彼僧ホが行ふ機変と異なるべくもあらざれバこれを彼ハよし此を
まとしといへることはやしなるべうして譲よりて耳を塞ぎて鈴を盗むのたぐひならずや
看官よろしく熟思すべし 第三
機変ハ独佛法に嫌ふのみならず、いにしへの聖人大賢みな機変を嫌ざるはなし

あしかるを秦の始皇楚の項羽漢の王莽魏の曹操等なとし機変
を旨としく漢土の天下を奪りしかとも子孫三世に及ばずして忽ちに滅亡せ
り　天朝にハ　後醍醐天皇をなし機変を旨とせさせ給ひし逆臣高時を
誅しのひしかハ尊氏より大魔障を接して出来して朝廷を傾けなまとり
あるを叡慮かくに及ひて北朝にハ三種の神器の贋物造作して北朝に渡し
なひしハの餘種々の機変をなしなかひしかハ竟に御本意を遂させて僅に御
三世まて皇統絶させたまひぬ人臣にハ平清盛源頼朝北條義時足
利尊氏直義織田信長豊臣秀吉皆是機変を旨として宇内を
制せるといへども或ハ子孫長久ならず或ハ子孫ハ九代十餘世に及ぶも
そのうちに義時ハ家僕に殺され足利ハ二百餘年の間天下暫しも静謐
ならず且弑逆に遇ひしも二度に及へりその餘従々の武士に至りても機変を

として家を亡せし魔障によりてかかることの数々に遑あらん然れとも
夫ハこの義を悟らん人間今日のうへに就てもおのつから世才あるものハなまし機変
を旨とせざるもなし武士ハ機変をもつて登用せられんと欲りし商賈ハ機変を
もつて屋を富さんと欲りそのほかの機心の動く処魔障をみつから惹出して敗
をとるに及ハさるもの稀なり上にもいへるごとく此の續西遊記の作者ハ機変の害
たる事を知るといへとも稗史小説を作るも亦是機変なることをわきまへての
故に機変ならんと欲するハ機変なきことをあらはさんとて其の言両京
にわたる機変の害あることを世俗に教諭せんとすハ是よりして世に悟らし
めん便是續西遊記の作者の功なりとかれハとてこの作者の筋をし発明
せしにあらん前記に載しる孫悟空猪八戒ホらの機変より魔を惹出せ
し事ハさらに三蔵も亦機心によりて魔境に入りしこと多かりこの義ハ前記の隠

微なるを續記に發揮するなれば此の續記ハ前記の注文とみるべしこれ
を前後往返の二事となしみるときハ全体の趣向理に稱ひて是愚か取らざる
所以なり　第四

三藏法師ハ金蟬子累世修行の権化之孫悟空ハ天地開闢より乃ち灵
物之猪悟能沙悟浄ハ天上神将の降誕く前世の罪障によりて共に魔難
にあふといへども既に数年の苦行を積みて灵山に到るに及びてハ心倶に
清果となりて遂に成佛すべきにあらねば既に成仏せしうへにハ機変も行ふ所なく
殺生もなすべき所なるべしされバ機変を行ひし殺生戒を犯せし者にハ孫行者乃
金箍棒猪八戒の九歯釘鈀沙和尚の宝杖ありといへども是を用る所なき
べし既に無用の物なれバ當日如来の三昧真火をもて是を焼鑠して
本来空にせしむべきなりと然るを如来ハ其の三兵器をとりあげて猶庫中

に蔵めおかせしハ是何の為ぞやそハ孫行者か事の難義に及ぶ毎に偷てとら
んとて灵山に至りて庫邊を徘徊して守護神に見咎められて本意をとげず遂
されしもあまりに愚なるの段點ごと羽の畧評に金箍棒ハ當初龍宮より
出るものや物始あれバ終あり灵山に蔵めおかんより舊（モト）へかへすべきなりといへ
るハ理りあるに似たれどもいまだ悟り足らざるなり本末始終ハ有漏の義なり
始もなく終もなきを是と名（ナツ）けて本来空といふなりまた（空ハ）悟道の中一切の義之
なくしてもなく心猿の法名を悟空となす物（モノ）空なれバ實を容るべし悟る
時ハ一切空く用ふれバ空も実に成る既にその実を払ひて舊（モト）の空に至らん
にハ棒鈀杖の三器械も必舊（モト）の空に帰すべし續西遊記の作者此の義を知
らざるにあらねどもあえて真経に没字の経あり有字の経ありといひ第
六十八回に真経隻字本来無の題目ありて此の回鵲妖ホか経担包を窃む之

とゝてその経巻開きえつるふ隻字もなくしハ元来孫行者の神術にて
鵲妓ホを愚ゝるのゝ真の経巻あるゝ孔ハ隻字もあるゝ孔のゝあるゝ孔
然るふ作者この回ふ隻字本来無の義と称せゝハ第三回ゝ釋そるの三藏ふ
真経と賜ふ段ゝ没字経云云とある照應ゝ本来空ハ大乗ハ要領よく
ハ芋をハせんゝハ続記の作者ハの百回の稗史と作ゝんと欲りそるゝも一字も
筆を下を処ふるゝしかる故ふ作者のゝろ佛意ゝ憑んゝ欲ゝそゝも
ゝてハ續記の趣向いて先ハゝて全体を理ゝ考と前記ゝ比をハ相
及んと難ゝゝ

第五

機変の害あるゝの既ゝ上ふいつるゝ如ゝ古人間今古事々物々機変ゝ
あゝきゝハ稀ゝ只甚ゝ孔ゝ甚ゝ孔ゝ甚ゝ孔ゝ聖人上ふ在をゝ孔ゝ
為ふゝゝ太平をゝゝゝのなゝゝ乎則機変をゝの義太平ハ仏説ゝ

所云平等の義ゝ去れゝも國ゝゝ乱をゝるゝふゝ既ゝその國乱をゝハ機変
ゝあゝゝされハ孔ゝ由ふゝかゝる故ふ孔子ハ軍旅のゝを問をゝゝ謀を好て成
さんものゝゝといり陳ハ機変ゝ若軍陣ゝ臨ゝても機変と嫌ひゝゝ謀の軍
をゝてゝゝゝんや宋裏の仁微生の信ハ所謂機変と知ゝぬ迷ひのゝふゝゝて
智慧あゝるゝの機ゝ臨ゝ変ふ應ゝゝゝ車の破をゝと結ゝ功あゝがをゝハ世の
為ふ害を除んゝハ機変ふゝゝて婦ゝ孔ゝあゝゝ佛説ゝゝゝ善巧方便即
是ゝ只身の為慾の為ふ行ゝ機変ハ是魔を惹ゝの捷径ゝ怕を慎ゝて
行ゝゝゝ孔ゝ行ゝゝ孔ハ必魔障あゝゝ又何をゝ疑んゝゝゝこの義ゝ非を知ゝめゝを
聖人ゝゝ孔大賢ゝゝゝハの故ふ軍旅の事ゝいゝゝゝも王者の軍ハ正兵ゝ機変
と用ひゝて黙評ふ孫子ゝ正兵あゝゝ奇兵あゝ云云ゝいゝゝハこのゝるゝ孔
唐山成湯周武の後ゝゝ正兵を用ひゝゝものハ蜀漢の孔明のゝをゝゝも三國

志演義ハ孔明ノ種々ノ機変ヲ行ヒテ敵ヲ誅シ[illegible]ヲ作リ設ケテ
孔明ハ[illegible]ノ人ト俚俗ハ[illegible]ヲ恐メ〳〵真トスルヲ孔明
ノ真ノ面目ト知ルヲノミアラ[illegible]ハ論ズルニ及ハヌトス陳壽ノ三國志
諸葛亮傳ノ自評ニ軍旅ノ[illegible]ハ長ズル所ニアラ[illegible]ハ詭兵ヲ
用ヒサルヲ識ルノミ陳壽ハ小人ノ儒ニシテ且孔明宿怨アリテ素
ヨリ公論ニアラ[illegible]ノ為メ詭兵ヲ用ヒサリシヲ[illegible]
孔明ニ所以ヲ[illegible]ハ機変ハ已ムヲ得ズシテ[illegible]
ニアラ[illegible]ハ直躬ニシテ其父ノ牛ヲヤミシヲ訴ヘ罪定ニ及ヒテ父
ノ罪ニ替ハンヲ願ヒ[illegible]ハ機変ニ[illegible]ノ正直ニアラ[illegible]故ニ孔子ハ[illegible]
父子ノ為ニ隠シ子父ノ為ニ隠ス直ニ[illegible]ノ中ニ在リ[illegible]ハ
機変ニ[illegible]子ノ父ノ為ニ隠ス孝ニ父ノ子ノ為ニ隠ス慈

ニ孝慈ハ父子天然ノ情致ニシテ外ヨリ求ムルニアラ[illegible]ヲ孔子ハ
直ニ[illegible]ノ中ニ在リトイヒ[illegible]機変ノ好ヲ[illegible]ヲ悟ル[illegible]続西遊
記ノ作者ノ口[illegible]ニ機変ヲ嫌ヒ[illegible]仏法ニ泥ム[illegible]ノ作リ倣
ル到彼僧灵虚子ハ亦機変ヲ行ヒ[illegible]ヲ機変ト所云ヲ巧
方便ニアラ[illegible]ハ嫌ハ[illegible]ヲ悪ム[illegible]機変ヲ嫌ヒテハ稗史ヲ作ル
[illegible]機変ハ人間ニ害アル[illegible]ヲ信ジ寧ロ説ハサテ蒙
昧ハ悟リ[illegible]但シ機変ヲ嫌ヒ[illegible]機変ヲ行ハ[illegible]ハ
音官還ヲ惑ハシ愚ニ贅言ノ諄々タルハ[illegible]ノ惑ヒヲ解ク為ニ第六
續西遊記ノ作者ハ彼僧霊虚子ト叶倣ヲ二人ヲ作リ出シ孫悟空猪八
戒沙和尚ハ[illegible]ヲ用ヒ[illegible]ハ到彼霊虚ノ二人ハ於前記ノ孫
悟空猪八戒ノ[illegible]只ノ救厄ノ人ヲ易ク機変ヲ旨トセザルノミ孫悟

の為ふ憾こゝろ有るべし且古佛件の二人よりこゝかゝる護送せよと命
ずるの後はたい面目を見して佛意のこゝろ安らこゝあらんらは
何等の為なるを知らと前記のこゝろ孫悟空役とつけて其の趣の同し
こゝろと最初のこゝろ予をもこゝろとこゝろを到彼霊虚は之用の人くさるを
孫悟空は権とらの二人を奪ふ是一大不幸といへり　第七
到彼僧は到彼岸の義之既る中流の煩悩を去り彼岸に到るの即是
成仏之又霊虚子は虚霊不昧の義之虚霊不昧は禅定を天地と俱ふ
静を天地と俱ふ做ふこゝの往こゝ不昧なるこゝ抑この二人は仏の
功徳よりてかる住帰とはるるや到彼僧の修行のは詳なるねとも
霊虚子はさせる功課あるのあるは然るる佛の撰擇ふあふて孫猪の
上る出るこゝろ所なる訴へ記なる非除はの二人を伴ふ出さるこゝて孫悟空を

前記のこゝろ使ふ前記は異なる作りさるはなるあるべし贄物を作り
出べし前記と趣を更まるせはなるべし妙なるべさるべ　第八
三蔵師徒四人十万八千里の苦行を歴べ灵山に赴き仏に拝見をべ玄
経を乞得てもるべ機心あるこゝを免をべその心さるも種々の魔難ふ
あるべ記はこゝを経揑を扛荷べ旅人足ふ異なるこゝ前記の趣向既し
真経をはるふ及はるべ一見魔なる唐士へ立ちかりてその功を奏し速ふ成仏
なるこゝ記はべ化作の及ふ所なるあるべ續記の作者はの義をおるべ蛇足の
為ふ再くこゝろこゝ長物なるこゝはべ倦むべきちべ所や百回の中は宜べ趣向
ありとはふるも趣向の立さは理義に稱はぬこゝあるこゝて賞鑒実ふ浅しり、
前記といへるも九九八十難のおるべ記ふ至りて皇復るこゝを以て綴その
るべ同べこゝさるも魔障なるべ窮厄を脱るべの外なるべ記の故ふ

飽くまでもちすてるのあるべきと又推かへして續記百回ふ麿難救厄の
のこるをいめつくしけるくいよ〳〵倦りかをとゝ續記も亦よれとるれり
あるいはそとゝ伝のそこいるる續記るハ前記のてるを宣復るく淫奔のるの用心
きるる第六十六回孝女割密被蜂妖　公子惜花遭怪病ちとある赴向
さの男女を淫奔のるるせるるハいるよりの段孫行者の言ふの孝女
公子の相思病るくハ老孫決〳〵救ふるいるとあるハ原この稗史を
仏書をるをるく淫奔のるを毫もあくせくと伝るる伝者の用意を示せり
さの作者ハ浮屠氏の忠臣欲かるるる折々あるる青官ふるるつけるるる臣
黙評ふ續記ふハ水怪多〳〵ふ宣復あるらるやといまとかも宣復ふ
あるるハ只水怪の多きのみ但亀妖る宣復あるそハ下の拙評る見るもし第九
黙評る経巻第九の害とるるりの蠹より甚しるふる又兩湿るよりて紙腐

物の害も少〳〵故ふ最初の害ふ蠹怪蛙怪を出せるるるるおりるる
やふ多くゆ具眼の人いるあるるんといるもつるるるるるる然も
ふ尋常の書籍るハ蠹と兩湿の患ひるるんふ経ハ見降魔災
消の奇特あるる且神王の守護るめるるるるハ蠹害も兩湿の患もるる
るものるるるるる非除その害あるるもせる蠹と蛙とハ親るるのふあるる
ちるはるるの二種の妖怪一致〳〵真経を褻讀せんるるるるるる
兩湿の因縁るるるせんるハ蚤も又湿気るるて生るるのるれ蠹怪
と蚤怪と一致〳〵云云と伝ふハ形も共るるとちるるて俱る人家ふ生を
るるのるるハ蚤さハるるる蚊も亦人を蠱て血を吸ることを嗜む悪虫る徒紀
ふ蚤怪蚊怪るるるハ送憾る又蛍るハ蛍雪の故るあるるハ書籍る縁るるる
あるるる蛍と集るるる夜学の燈る易るるハ貧困生の為る宜〳〵

蛍の為ハ苦こふるへ〳〵かゝるハ蛍怪なる心あるまくらかきなる之續西遊
記の作者こゝらに心を用ひさるし儒書と仏書乃差別ある故歟さるハ
思ひの足らぬ〳〵なる〳〵第十
續西遊記の作者金箍棒九歯鈀宝杖と易るゆ梛子と念珠子とハ
被ハ兵器に類〳〵此ハ仏器まて殺伐の用なく只魔を退治するのみ
ハ僧家なるゆえ〳〵ふるまるとそのの機を臨〳〵用るとその義ハ
見異なるまたまるのゆハ黙評よりつくさるゆ畢竟金箍棒と九歯鈀と
梛子と念珠子とその要五十歩百歩の間なり梛子と鳴〳〵念
珠子と変化して魔怪を退るし機変の外と出るとも見そ異と
いふ〳〵何物ゆ異なるさん呵々第十一
又黙評ゆ第三十六七の二回餓鬼林（曹操の魂魄と出〳〵且こゝを
辱〳〵めゝハ最愉快なるようといひそのゆ愉快なるあゝ称とも予ろ
思ふ〳〵ハ見と異之故いうとゆ〳〵ハ曹操ハ書籍ふ拘つひる故事あるに
さるを他ゆ魂魄ハの餓鬼林（さまひまゝ両個の寵姫と魔王ふ賞玩
せゝるゝるいふ物ゆゝハ木ふ竹と接きるゝ〳〵秦の始皇なるとて書を
燔きるる故ゆあるとハ蟲と雨濕なるとよりその害甚しきあるゆかゝるハ
餓鬼林（秦の始皇の魂魄と出〳〵その書を燔ける罪を責めるハ見
書巻ゆ縁あるてゆさゝ記物ゆゝ又ハいふ〳〵のゆのゆるに
周の穆王ハ駿ゆ乗り化人と郷導まして天竺ゆ赴き佛ふ面會せと
いふゆる記小説（穆王傳）あり又劉向ゆ列仙傳ゆ佛氏二三人と收めゆ
かゝるハ後漢明帝より前ゆ佛法ハ中土ゆ入りるるとアるといふゆのも
あるハ見ゆの故ゆとゆ〳〵集めて古の續記の趣向ゆせハ前記とその

赴けるかゆへ新らしく思ひつきて續記の作者ハ思ひよらさるに及ハれ
たゞ前記の糟粕を再製して種々の魔怪を出せるのミ旨とせしハいかに
そや予ミて稗史を見るに唐山にも世に勝れたる作者ハ稀に只よき作
者の稀なるのミならハよくみゆるものも亦稀なるへし　第十二

又黙評に第九十一二の両回に獅毛の妖魔の為に霊虚子比丘僧も
孫猪とともにたゞに窮せしむ既に前記に孫行者か金色の獅子を降
せしに際に似けるかく終なる獅毛のかくまて威霊ありしハおかしかるへき
し悟空の毫毛も悟空の使ふにより種々の変幻ありとも一体の
金獅ハ原へ入りたるにその獅毛の本体に倍して霊威の皇したまひしと
いたれしハよし但批評く只ならぬのミならん第八十六回獨木橋の段に孫猪
沙三人并に比丘僧まで六䶊妖の為に豹山窟中に閉篭られて出るを
ゆるされハ余後に三蔵も亦六魔に拿られるに及ひて霊虚子か是を救んとして
来りて六魔と戦へともかなハねハかへりて窮して獅子を鳴らせしかハ四神王土地に
光臨して妖魔を退け三蔵師弟と比丘僧を救ひ出されし第八十六回より
八十八回まてにみえたり畢竟續記の四神王ハ前記の観音之又比丘僧霊
虚子のなれ所ハ前記の孫悟空の役之只その役者を異にせしのミさるを比丘僧
霊虚子か妖魔の為に窮せらるゝとあるハ亦是機変の崇示なりさりとハ比丘
全真の二人を作り出せるに及ひて行孫獨沙三徒第ふてくるハ海へしにしれた
よまとハ到彼霊虚ハ実に是肬物之　第十三

第二十七回意正毫毛帰本体とりに段に孫悟空その身の毫毛を抜て
変しなるを妖魔に拿しれて心地常ならぬ本身の痛むことありまつるに九十
二回に彼獅毛怪か種々の障碍となせしを本体の金獅ハ知らさるてけるへし

續記に見る所の物よりハかやうに筋のわからぬ事あり孫悟空か毛を抜て
変せし分身の假悟空のよくものをいふ事をなしたあり又ものをくひなとするの
破れたるなとあり共に是悟空か神術なれハ假りにしろ假悟空なるに時に
よりて巧拙あるハいふにや筋のわからぬ事ハその類多くあり具眼の人ハよく見
るへし 第十四
第五十六七の両回陳員外の女子陳宝珍か妖なる者に物をとられし作者の淫奔を
嫌ふ気に宝珍を攫ひたる鳥魚怪ハ色欲を知らすして只その血を吸ひ肉を
喰んといふ瘦形なれハ速に手を下さんよりその肥満するを待て喰んとて養ひ
置しよし作りしハあつくまよはしてうるに仏徒に救せん為なれハ身を汚させし
との用心なるへし去れハ第八十三回に八戒悞被淫乱といふ物語あり又第
二十一回狐妖計識真三昧といふ物語の中に狐妖か迷せし和尚并に後生
共か始末ハ妖狐の假色に惑ひしハ淫奔の事なり又第三十六七回餓鬼林の
段に曹操か細腰姫の陰鬼の段にハ美計騙のみなり勿論淫奔之但こともなし
三藏師弟に救れし故に淫奔を忌されたるなれ歟 第十五
第三回に仏の真経と三藏に附属したる段に悟空悟能に戒めし物語
ありしを真経なくハ金箍棒九歯鈀ハ要なし金箍棒九歯鈀を用ひしハ
真経ハ要なしといへとも又後回に至りて身ハ是真経にして是身といふ事あり
これ作者の専文にして續記の趣向なるにまよはしまよはしに三藏師弟
の機心いまた耗さる故に種々の魔怪ありて真経を褻瀆せらるゝに至るとなれハ
便是三藏師弟の罪にして霊山の古仏三藏の深信堅固に真経を守
る本心をみるとして両三度比丘四衆とあらはれの為に遣させしハ小廝に金を
ねたらしく使に出せしに異ならぬ佛らしまてに三藏法師を疑ひなく初より真経を

渡りめぐりて八畢竟十七万九千八三藏師弟苦行して灵山に到りて
清果とはるふよう真経を授らるとそ真経に降魔災消の奇特あるを
もて諸魔の障碍をなすとあるとは三藏師弟の功德さて真経の霊
光掲弓もて愚俗の信仰十倍あるべかりしかるに故りを
理なる趣向をなす作者の両舌を使ふてまるを笑のあるみそあらはる第十六
沙和尚八前記のその役廻り悟空悟能に及ひそ八第三番の役者なれ八
くちなるとも前記に悟淨し相応の役をつけられしるる為に續記に至りて八
悟淨一向ふ役なるに只見折々その名号を出すのみにて八化玄の人形を使ふふ
ムうあり（但し沙僧八第六十三回ふ八戒と共に菩提子をとり復さんとて元亀性と打殺と第七十九回猩性に毒害の段ふ耶役あるとも只拘らずぐるるり）第十七第六
十四回誤把五行認妖孽辛子とある一二回八續記中第一の妙趣向なれ五行を錯
乱せるの磁器ようを甚しきもの磁器八土なるに製に還る土の性を失ふむ
ふるるに磁器の碎けるを章るいへとも原の土に復るとふ去の回に妖八もつて
人の惹出すよりと分曉に奇行あるものふ必奇禍ありとふ者を諭しるも
去るとふよりるものふあるをれふその言朦朧に悟りるるに第十八
第五十八回師徒設計変尼僧とある段三藏師弟両と尼菴に避人為ふ
例の孫行者の神術にて師徒四人尼僧に変じるに八第一の悪機変なり
この故ふ悪少年ふ假妖魔の果報あるに八戒を苦しめるとも僅ふ雪を
賞し詩句を賦せるより妖魔を惹出に難義なるひしるるふ比に八け
崇甚狂りなりて八悟空の悪機変のるるに八第一作者の悪趣向第十九
亀精推算の怪談八第七十回の末より第七十四回に至るこの回車遅國勅建
智淵寺の長老利慾に耽りて竹木を伐り岡河を荒せるより亀妖の為
に拿られて岩窟中に壁閉せるを今の世の和尚の為に豆さ鍼砭

なるへしもちろん亀妖の假長老か三藏をまねくに招待せんとて両個の徒弟に齎
しておくりし錦囊の書は奇計ありやあらんと思ひしにさにあらすして只は招待の簡
牘のみ但し三藏師徒便路なりしゆゑにとて辞しさりし智淵寺に到りしは
前記に趣を異にせん為に亀卜の術ありしにて亀妖か推算の妙あるゆゑなりとかは
似しけれとも前記の車遅國の段奇々怪々の妙趣向にてこれは明月の後夜の
紙燈に似たり但七十三回孫行者か亀精と術を戦はする段に初は亀精に
和尚を孫行者と知らすして悟空の威風を怕れしに悟空か真形を顕し
示すに及んて還て怕れすして遂に術を闘はするに至りたりこの回の批語に亀精
聞行者名十分懼怕及見真形反加侮弄故兵不用為威先聲
奪人之氣乃為上着行者听他説怕急急現形真小家子也といへる
は妙評にしてまた毎回の批語は作者の自評なれはその文本文とよく似たり

この外にもよき批語あれとそは志ある人そ知るへからん 第十九
前記には諸妖魔三藏法師を蒸し啖んとし種々の機変をなすことを
生拘り或は猪八戒沙和尚をも拿細めしたるの難儀に及ぶ毎に孫行者
千辛万労して師徒を救ひたりし一己の神力なよりしかさもなくは観世音
の幇助を乞ひてその厄を釋けたる所謂八十一難是なり續記には又諸
妖魔か真経を奪とらんとて種々の機変をなし経担を褻弄しけるを比丘僧
灵虚子倶に苦辛してその経担をとり復しけり二人の智力によりしかさもなくは折
は梆子を鳴らし四神王の幇助をかりてその厄を釋くの外なし畢竟猿に
被せたる猿の面なく真面假面異なることもなし猿たるよしは共に差なし前記
の畔埒を超ゆることなく別に新奇の趣向を建るへきはいとめてたかるへけれ
ともさなんては甚たかたく唐山文華の邦なるをいふそ後人かかる筆をささは

ゐるゝを見て我邦の人る倣ひて誰う又ようとくき稗史の作ハ別
オるりそゝ亦博学の餘力ふるゝとう唐山ハ文盲蹂文の作ちるゝ
ゝ賞玩ゝ之ハるゝ稀ゝ凡稗史の作ありゝより里巷の小児と悦ちる
ゝハ易ゝ君子の齒る掛ゝろゝてハ難り世稗史と批評ちるものハ多ゝ
作者の苦心と思ふものハ寡ゝ好ゝもあるゝ又ゝもあるゝハの百回の長物語
と安ゝふ写ゝゝる文華の筆力羨むへゝ総ゝ清人の俗語ハ讀る
ゝゝ且本記ハ毎回妙文處々ふあゝ不佞感心浅ゝゝゝゝと云云と批
ゝる俗ハ岡視八目のゝ上ゝ評せゝものゝゝ機変の人間る害あるゝ
と叮寧ゝ分晩せゝハこの作者の老婆心ゝゝ世を警る功德勘ゝゝ
見ゝと寺院の説法ゝゝゝ痴翁呆婆ゝ聽せるハ亦迷津の一筏るん坊
問ふ淡美本ゝゝ桜姫日高川外萱道心のゝるゝとゝゝ倣り

設けゝるあゝゝ浅ちるものゝゝ愚俗を醒ちる足るものゝゝハの續西
遊記ちゝゝ完ふゝ記談美本ちるゝちゝゝ淡半僧ハ大ゝ文亡目ちゝゝ
ゝハかゝ俗語ゝ續むゝもあゝ贅言ちゝかゝまて思ひよゝと漏さ
ゝそるん 第二十

第十二回水火精灵噴ゝ氣焔ゝあゝ段る赤花蛇妖火焔を噴ゝ一山を熱
ゝゝめ霊亀老妖ハ水ゝ氣を噴ゝ山澤を寒ゝむこの殿中の妖魔ふ
玄鶴老妖白鹿老妖古柏老妖ホあゝハ皆仙家有用の物を集めゝゝそハ
とまゝとかゝもあゝハの回ふ火亀老妖あゝゝその妖術少々ちゝまちゝに
又第七十四回ゝ至りゝ亀精推測の怪談あゝハ重復ゝそのあるゝゝゝと
いゝゝ亀妖と二度使ふハいゝゝちゝ又鶴妖も十二回八十三回重復あゝ第二十一
前記ハ觀世音度々出現ゝゝ三藏師徒の魔難を救ひふ續記ハ

菩薩の名號と見させ到彼霊虚の假号(ツクリナ)とするのハさらに觀音ハ易ふ
四神王とハ四神王ハ甚磨なる天部なるを知るを又後ハ霊山より下る
四菩薩と比丘四衆とのみ唱へ名號をあらはさん作者ハ何の用意ハ
佛菩薩を推當へ侮弄せ〻るの為なるべしとも等一回ハ如来といひ
釋迦牟尼尊者南無阿弥陀佛といひ阿難尊の名號あり但觀音
菩薩のみ觀世音ハ前記まいらせ骨を折りなひ〻ハ三藏師徒のかへさるハ
なるべし面白〻ものハ我國俗のいふ所なるべしん敢胡盧々々等廿二
等五十二回迷識林の段ハ八戒妖魔ハ迷識せ〻るを親疎を辨せを跳り
狂へ〻已さらに比丘僧霊虚子なる見を醒さるるるかハ孫行者飛
斗して〻霊山脚下なる玉真觀ハ到り〻大仙名号ハ救ひを求めハ
大仙所〻我ハ道飛斗飛行の術をよくせるを速ハ到りて又我去て

妖魔を驅除へたる親〻まを當初如来の経文を你達ハ給ふ〻
このあり何を経文を把〻繳還せさるといふを〻ハ亦是悟りの一義なり
夫觔斗飛行の術雲ハ騰り駕ハ万里を瞬息ハ走るのハ大仙の
真面目なるを又符をハ〻邪魅を驅除へるハ病ハ愛して業を用ル
ハ如〻ハ〻亦真仙のせさる所なり彼一心を我へ〻ハ静なるハ驅
〻〻妖魔ハ去るへ〻世ふ仙を説ハ佛といふの種々の変幻奇特を
以を〻仙仏の真面目なるんや觔斗飛行の神術をよくせ〻又符を
以魔を禳ふことをせさるの是大仙さる所以ハ〻ハ他去の隠微なると看
官悟へ〻ハ〻ん世ふ病あるのハ養生〻〻その病原を治るよ〻と思
ハ〻〻〻只醫の治療を微(徴)め鬼出示あるのハその魔到来の所以を悟
ら〻〻全真の符を求む一旦その效あるとハ〻共ハ長久の術

あるべき續西遊記の作者よりこの書を思ひあるべき蒙昧を醒さん
と欲りて世上往々迷識林をゝねがひ我小子も亦この迷林を
伐いらんと欲すること久し　第二十三
扨この回は孫行者大仙の教諭をうけて灵山に到り如来に八戒が妖魔ふ
迷識せるかを報ゝ救を乞まりしと如来聞て道吾既把宝藏
真経文付與汝師徒爲甚不仗此真経敬謹前行却多生一
番枝葉攪擾如来只説る這一句即命左右閉門聚聖
合散孫行者沉吟半晌云云この段作者の真面目なるか
孫行者沉吟の折比丘僧（到彼の比丘僧なるべし　架親近の比丘僧なり）四句の偈を授けて行者に仏
旨を悟ゝむ偈は道身原不離経　経豈離身　仗此無悪怖諸
魔誰敢侵　八戒もまたよりてその迷乱覚て師徒迷識林を過る
ことはこの一段只文面に就ゝて見るときは経文の霊光なるべきに魔難を
脱るるやうなれども心を真経の文のごとくふる者は身と経と離
ることなく身と一般なれば其身即成佛なるべし怕ゝ所なるその怕ゝ
所なるを諸魔侵すとあるは一心覚悟の大関目看官ゝ思
ふべし　第二十四
この書作者の意匠伏線襯染照應照對及對句の文なるべし只六十九
回なる悪少年の假魔王と七十六回なる大光禅林の悪長老通玄を
嚇懲せし灵虚子到彼僧の假神將は照對なれば冥き赴向なる仏
又八十二回假神將嚇吏奴魔とある段なる亦灵虚子到彼僧なる灵
山差来の假神王なるべし（狸々狸）怪を詭吏せしは重復なり又七十六回大
光寺の段は孫行者なる王員外の假灵魂なるべし王甲并なる通玄を

嚇伏せ〜〜と第八十回る灵虚子到彼僧ら機変そ〜〜八戒沙僧の灵魂
よるり〜〜毒害の寃苦と三藏孫悟空ホる報る段資ひて是評それ
及對之故いるよしる〜〜八孫行者ら假魂霊八王甲の強証と嚇伏せん
為之又生僧灵虚子ら假霊魂八八戒沙僧と救ん為ゑ八自他の
差別あるよるて及對ととるとし縁る四五回の間ゑ假魂霊
と二度生て八後自他の差別あ〜〜〜重復〜〜〜を免ととそこ八
ゑ〜〜作者の失之後の假魂灵と夢ゑるとにせ八重復を免ゑ〜〜第二十五
又ゑとホ作者の趣向ゑ伏線對応の文稀ゑるホの書百面陸續
ちゑ〜〜ゑと是八紀行ゑ類〜て毎回敵手の妖魔同〜〜ゑて國邑し
異ゑる故之前記亦伏線對応の文稀ゑる是自然の勢ひし
さゑて〜〜本記第八十二回掲山后放逃猩怪とゑる段ゑ孫行去ら

猩怪を生拘りて壁勝ちゑる折將一塊山后壁上妖身口中念有詞
只見那怪毫毛不能動ゑるとゑる八前記の如来五行山ゑ石狹を壁鎮
ちゑ〜〜照応之さゑと八ホの折八戒ら詞ゑ大師兄云云他曾壁在五行山
如今把妖壁在長溪嶺といる八是作去の自注ゑ〜〜前記五行
山の照應ゑるを看官ゑ報ゑ之第二十六
この五行山の照應ゑよ〜〜〜〜意ゑる孫悟空八天地開闢ようの霊物ゑて
當初八兇暴も甚〜〜〜〜八如来遂ゑ五行山ゑ壁鎮ちゑひ〜〜ようる星霜
五百年と歴〜〜その罪を詩さゑと即佛法ゑ帰依〜唐三藏の徒弟
〜ゑ〜〜十万八千里の逆旅ゑ相伴ひ〜〜八十一難の妖魔を退治〜〜〜
その功最高大之かゑ八三藏法師ゑ倶〜〜〜灵山ゑ到り〜〜折如来その
功と賞鑒〜〜〜先他とて成佛せ〜〜め機変殺生の心ゑ〜〜〜めてゑ

又帰路の魔難の折城(アセ)せるを、到彼僧、求聖子の二人を、ひそかに隠
さふ遣せるも及ばず、孫行者、歓ひ〳〵金箍棒を乗却して、唐三蔵と
守護して、帰路に、殺生戒を破り〳〵、経文を護送せるのみ
なるを東帰に及びても、前記の観音のめぐらせる緊箍呪を拿
除せるを、その故に孫行者、はらへさるもの、緊箍呪と荷厄會にて、
唱きこゝろ、一百回の結局まで、緊呪と脱離せゝるといふて、答えし、
作者の忘れるを、悟空の為に不幸といへり。第二十七

作者第一の苦心は、孫悟空に殺生戒を守らせず、妖魔と退治せるの
こゝろ、化去難業の場を、ものがたりて、写して、彼金箍棒、
九歯鈀の兵器を、いたゞき換る念珠と梛子を以て、化ふ
難らを、只殺生なるを、きめて、作者の骨折と賞えるとも、殺伐の

ものに故に前記を、ぬきにせる情寂として、華やかなること、高尾もなそう
中に上快十冊に、下快五十回以下なれども、彼西洋記のごとく
拙作なれば、ふる月をせて、おのづから、巻と卒る回数あるを
なかなか評せば、聊理を稱ずして、趣向あるとして、前記と藏弆を
さゝん人、必ずこの續記をもてはるべきの珍重々々第二十八

第九十五回に、病鬼を出せば、病痾は世の人みな、惹出すこと
多くあり、化酒食と過度、或は好色貪淫して、命を隕すもの、或は
その好む所に偏樂して、寒暑に傷られるもの、動かすは、詐魔
の中、病鬼の人に祟ると、最多くされば、九十五回の趣向は、世俗を醒
さ、獨参湯、又第九十九回、借宝象乗載真経とある趣向、
さ、三藏師徒四人既に唐土に帰着せ、日に孫猪沙の三徒弟、経

捏と扛荷し三藏ハ馬馱牽紀つゝ入り来るこんまろ伽藍
身栄万々人と幸ひ劉員外の大家を恵借して経捏を咸駄
〻ハ前記室象國の段と照應〻ゝ但し其の段ハ鼈精并ハ蝠精の
妖魔あり聊障尋ゝるとい〻ども最後ハ孫行者ゝと竜王
三藏ゝと放ち〻ゝ團圓ハ至る所云鼈精蝠精の二妖ハ真経東漸の功
德ゝよりて吾得福の美人作者の隱微おもひ〻ゝ鼈ハ吾ハ通ひ蝠と
福と同音鼈蝠ハ即ち吾福之第二十九
外國の人ハ陳員外陳室珍王員外王申劉員外をとゝみる唐山人の
稱呼あハ婦幼の為ハ設け〻ゝ前記も既ハ其の例あり此間の草紙
物語ゝも外國人の姓名とハ〻ゝろゐゐめ多〻あり〻ゝと翻案〻〻
皇國人の姓名ハとり易ハ婦幼もまゝろゐ易き如し作者の用心

和漢相似〻ゝ亦怪しむ足〻ゝも咎むゝ〻ゝ第三十
第七十八回福縁君深山遇祖とある段花菓山水簾洞の猢猻怪を
出せしハ看官ハ懐舊の看あ〻せんとてのゝ〻ゝハ且老猻の
福縁君ハ三藏師徒ハ害ゝるまゝ孫行者ハ面叱せ〻ゝ花菓山
入り来ゝも悟空の面目ゝゝ作りゝるゐ但し此の福縁君
の棋友ハ鶴怪の善慶君ハ猩怪と一致して能〻三藏師徒を
惱せ〻ゝ故ゝや鶴の異名を仙客ハ呼ひ〻ゝめて〻ゝ記あるゐ
本紀ハ鶴怪と三四ケ所ハ生〻〻重復とゝ上ハ〻ゝ亀
精ハ重復あゝゝ鼈怪ハ〻ゝ蒼鷺ハ〻ゝ怪とゐゝあゐハ重
復の鶴ハ易てもよゝ〻ゝ猩妖ハ三三度出ゝゝ猩妖ハ〻ゝ作者
のゝ〻ゝに好憎ある欲ゝゝ第三十一

第七十九回は猩怪八戒を毒宝瓶巻末の批語は人之取猩々也
酔之以酒其筭計唐僧正是用我法といつゝハ佳評と上もいつる
ゝゝ批語は佳妙ゝゝ枚挙は遑あらず第三十二
這一百回毎回細は批評せんいとまるけるとハ只その妙処と瑕疵と重復
ゝとのゝ畧評して看官は悟ゝゝも猩史の作の容易もゝさるさゝ
ゝ前輩の妙編と接きゝゝゝ一百回の長物語を綴らんるも中才の
他去の及ゝゝき技はあゝゝと西遊記八四大奇書の隨一るもハ唐山まで彼八
十一難とゝゝ飽とゝ思ふ看官の尋ゝゝとハ近屬後西遊記續西
遊記の二書船来ゝゝゝいつもも前記は及ゝゝゝゝ続記は彼隠微を
裁揮せゝゝと嘉ゝゝと是ゝ先は明の嵩暦板の西洋記の一書あるその
趣向ゝゝゝ西遊記と剽窃稿摸擬ゝゝゝゝ西遊記の類はゝゝゝ

只軍旅中の怪談はゝてつゝおゝゝゝゝ明の姑蘇の笑花主人は今古奇
觀の序は西遊西洋逞臆於畫鬼無関風化笑取連篇といへ
ゝゝ西洋記は拙劣るもの之目を同じて論はくもあゝゝとハの
續記のゝ記八瑕疵るゝゝゝゝゝゝ看官則こゝるゝゝゝ前記
の隠微と悟ゝゝあゝゝ便是續記の作去の功德之さゝは大業の我
と知ゝゝものゝあゝゝゝ思ひ半は過ゝゝゝゝゝゝゝ我ゝゝ只知音の為は
いゝのゝ第三十三
第六十三回降妖魔経僧現異とある末段は孫行者到彼僧柔虚
子の封市助はゝゝゝ西元黿怪と伏ゝ菩提子とゝゝ復ゝゝ到彼僧は
送りゝゝゝ又宝鏡ゝゝとゝあげて師父手藏ゝゝゝゝ段は只見空中五
色祥雲雲中現出一位真仙道快還宝鏡来此宝即是真経不

容並立那唐長老只可志誠共拳経文休持三種三藏忙向空
合掌了把宝鏡献上那空中一隻金手伸將下来接去り
不知所向師徒們方纔驚異とあるたの真仙ハ何物なるを詩
ふせる元来ハの宝鏡ハ漢の張騫ガ浮槎ニ乗りて河源を極めし
折料なるゆるめるなるを通天徹地の妙要あるよ前段ニ云へる
ごとくハこの宝鏡ハ是真如の月にたとへ真仙ガ三藏ニ諭
示したこの宝鏡と真経と並立へるごとくいつくに宜なり宝藏ハ経
の旨ハ真如の月を明ニせん為ニ真如の月既ニ吾懐ニ在りて曇る紀
ごとくハ真経なるごとく成佛ニそなへかる故ニ並立へるごとくいつくに
の作意ハ宜しくはなるとく真如の月の宝鏡といふる故ニ二元龜怪ガ
手ニ入るごとく暫藏奉ガ又按まるに元龜ハ介類紀

陸ニ屬して且元龜の骨間ニハ数隻の明珠あるもあるかごとあると紀ハ
ニ価の至宝のごとく拍案驚奇ものかうあるとハ物類相感
の理なるべし月鏡ハ元龜の巣穴ニ沉淪するもあるべしかうハ
件の真仙ハ天帝なるべんごとくハ他ハ玄の隠微なるとハ摘とりて詳ニ坪
定するべしよく考るハ他の隠微もあるべけれどもさるいとまなるけれハ只
その尤きを挙るのみ坐ふ思ひ出るまゝかゝちるつけるとハ回数も
雜乱なるべし順なるさるとヨタクそなる本文と併し見ハおのづから分明
なるべし　第三十四

國字總評終

續西遊記二十卷、借閲吾友篠齋翁藏本、余生平筆研煩多、無讀書之暇、是以借留稍久而得賞鑒全部、号卒業間戯演國字畧評、三十四則、以爲惠借之報如左、時

天保四年皐月十三日

江門　著作堂主人稿

古佛為一藏経。費了無限心機。千萬世而下。許多罪福皆縁於此。信是如来多事也。（第七十八回九丁尤妙）是評最妙

第九十七回蕩魔道院老道法号丹元道術高深云云こハ五人よりあるなるもの回の贅物なり

第九十七回鼈精偷孫猻沙の禅杖ハとり復さるもやはぬるも禅杖ハ不用なる故よ欲さるもこの禅杖ハ是山なて欲さるの賜なりこの妖魔よりそのまに捨おくさるのよりそれハそこの化者のよぬるこの九十七回の批語よ繳り兵器又與禅杖本等。是佛祖多事○禅杖号形。害人尚淺。機心号神。更深甚于用金箍棒矣。鼈精偷去禅杖行者（コノウラ國ス）るこいあるもこと詳なるこそ佛祖の方便なるこそとりあけこそるるこハ妖魔ふ

偸とらるゝうらみく他去結局ヨリ事なくれところあるへし
第百回三藏帰唐の詩ヿ聖僧努力取経編。往返辛勤念八年
云云前記十四年後記十四年合して念八年也

右補遺評